ヒキコモリト肉食ノススメ

海老原　晴香

教授と、その指導学生との関係とは不思議なものである。まるで実の家族のように親密な折もあれば、突如少し距離ができてしまう時もある。せっかく教授からいただいたありがたいアドバイスに学生が猛烈に反発を覚えることもあれば、学生の方が教授に助けを求めてすがりつくようなこともある。しかしどんな場合でも、教授と指導学生という関係が保たれている限り失われないものがある。学生の、教授に対する強い尊敬の念である。

初めて宮本久雄先生にお目にかかったのは七年前のことである。予想に反してずいぶんと気さくでフランクな風情の先生だな、との印象を持ったことを記憶している。一般企業勤めを辞したばかり、神学の基礎も研究の基本もおぼつかずにびくびくと先生の研究室の扉をたたき、「先生にご指導いただきたいと考えているのですが、勉強不足で能力にも自信がなく云々」と、早口なうえ不安からいつもより一層小声になってしまった私を早々に遮り、「まあ何でもいいからゆっくりやっていきましょ」とおおらかに受け入れてくださったのが、当時東京大学を退官されて上智大学へいらっしゃったばかりの宮本先生であった。こんなふうに書いてしまうと、宮本先生とはざっくばらんな方のようだけれども、もしかするとかなりの楽天家で大変な放任主義者なのでは、とのイメージを持たれかねないが、決してそのような単純な人物評でまとめることはできない。飾らないお人柄で、また大変おおらかな方でいらっしゃることは間違いないが、同時に指導学生のことを（いや、指導学生にとどまらず、まわりに集うすべての者のことを）実に細やかに気にかけてくださる方でもあられるのである。指導を引き受けていただいたにもかかわらず一向に筆が進まない私にも、これまで七年もの間途絶えることなく陰に陽に叱咤激励くださっていることには、ただただ頭を垂れるばかりである。

宮本先生といえば、その豪快な飲みっぷりも知られるところである。先生にお世話になった者なら誰でも一度は耳にしているのが、ゼミや研究会の締めくくりでの先生の一

言、「まだまだ議論も質問も尽きないでしょうが、その続きはこの後の宴会で……」である。初めのうち、これは気の利いた先生節の一種のジョーク、はたまた研究会を酣のうちに自然にお開きにするご挨拶の口上か何かだとばかり思っていたが、なかなかどうして、先生のおっしゃることに嘘偽りはまったくないのだ、ということが徐々にわかってきた。もちろん、合間にはごく打ち解けた世間話なども挟まれはする。しかし、宴席での多くの時間は本当に白熱した学術的議論に費やされるのである。ただ一つ、その宴席以前のゼミや研究会での風景と異なっているのは、宮本先生も参加する者も皆、手に手に酒杯を持ち上げ、実にリラックスして議論に熱中している、ということである。下戸で残念ながら楽しく酔う術を知らない私は、かえって気後れしてしまって熱を帯びた議論に圧倒されるばかりということも多いが、ほの赤いお顔で真剣に神の真理と愛について、生けるロゴスについて、人間の罪について、世界にはびこる根源的な悪について語られる先生の口調にはいつも迫力が漲っている。ほろ酔いでいらっしゃることがとても信じられないような気持ちになるのである。

宮本先生が長年をかけて取り組んでこられたテーマや問題領域は多岐にわたっており、そのすべてを丁寧に追っていこうとすると、たとえば私のような者では一生かかっても目をさっと通すことすらかなわないほどである。そのような先生のご思索の広野の中で、ご関心の中心にあるテーマの一つとして、「共生」（あるいは「相生」）があげられるだろう。先生にとって「共生」とは、自分とまったく異質な他者と出会い、親愛をもって関わることである。とはいえ、自分とよく似た者（たとえば血縁関係にある者）との関わりを軽視していらっしゃるわけではもちろんないと思う（詳細にうかがったことはないが、先生のご家族の様子が垣間見られるようなお話をふとなさることがある。そのような折の先生のご表情は穏やかで、ご家族をとても大切に想っていらっしゃることがよくわかる）。人間が自分と似た者に愛着を抱き慈しむことは、言ってしまえばあたりまえのことで、それをことさらに大切だとあらためて強調する必要はないということかもしれない。もとい、たとえ肉親であっても他者は他者である。これまでに一度、「家族や親しくしている友人関係から一歩身をひいて、一人ひきこもる時を持てるかどうかが重要だ」というようなことを先生から言われたことがある。「共生」することの意義を熱心に説いてい

らっしゃる先生が「ひきこもれ」とは、ずいぶん矛盾しているではないかと、当時の私は微かな反発心を抱いたものだったが、それこそ近しい者への自己愛にも似た感情に覆い尽くされてしまって、より広い視野でひらかれてくるはずの他者との「共生」の地平に気づかぬままとなってしまうことを心配してくださってのことだったのではないか、と今になって思う。自分に似た者に愛着をもつことは、ややもすると自己を溺愛するエゴイズム、ナルシシズムに限りなく近づき凝り固まっていく危険性をはらんでいる。家族や友人との近しい関わりのなかにも、日々新たな出会いを求め、相手のうちに秘められている他者性に気づく機会を自ら設け、尊べる者となりなさい、ということであろうか。他者との関わり、ということについて先生ご自身はどうであるかというと、たくさんの研究会やシンポジウムを精力的に主催されては新たな出会いに身を投じていらっしゃる一方で、毎年必ず伊那の山荘にまさしく「ひきこもり」、半月ほどもそこで過ごされる。共同体的に生きるときと隠修士的にすごされるときを共に大事にしていらっしゃる、と言うことができるだろうか。おそらくどちらの時も先生の意識のうちには常に「共生」の二文字が息づいていて、他者と徹底的に（すなわち時に自己犠牲を伴っても）寄り添い、愛情を注ぎ合うとはいったいどういうことなのだろうかと、祈り問い求めていらっしゃるに違いない。

数年前、宮本先生は突如生活方針を転換なさり、それによって周囲の人間は軽い（あくまでもごく軽い）混乱状態に陥った。〝肉食中心生活〟に入られたのである。より正確に言うと、食事の際に主食となるはずの炭水化物を一切断って、主に肉、続いて魚や乳製品などのタンパク質と野菜（ならびに数種のお酒）で空腹を満たす、という生活である。それまで好んで召し上がっていた白米や日本酒（「新潟生まれなので米が好きだし、こだわりがあるの」とたびたびおっしゃっていた記憶がある）をまったく口になさらなくなったので、さすがに仰天した。この方が身体にとっては健康的なのだ、と昼食に大量のソーセージの塊を召し上がり、研究室を訪れた学生にも勧める先生の姿にいくばくかの不安を覚え、ご指導いただいている学生の何人かでなんとかして少しでも炭水化物を摂取していただこうと結託したことが懐かしい。炭水化物も含めてバランスよく栄養素を取り入れることが内臓の負担を抑えるために重要である由を主張する学術的な論文を先生にお渡ししてみたことも

あれば、脳に直接エネルギーを送ることができる唯一のものが炭水化物と糖分なのですよ先生、とやや学術性に欠けるような話を切々と訴えてみたこともあった。それをにこにことお聞きになりつつも、頑として食生活をもとに戻そうとはなさらなかった先生である（現在は少し制限を緩めていらっしゃるようである。日本酒も、少量ではあったが白米のごはんも召し上がっている姿を先日拝見した）。

その先生を久々にゆっくり訪問させていただく機会があった。こちらからは研究についてご相談させていただくことに始まり、仕事のこと、生活のことなどをお話し、その後先生のお話をうかがっていて、はっとした。先生が次のようなことをおっしゃったからであった。「私にはやりたいこと、やり残したことがたくさんありすぎて、今はとても引退なんて考えられない。まだまだ野心の塊が胸の内にしっかりある」と。それに先立つことほんの数日前に、大勢の学生が集うゼミでは逆のことをおどけた風情でおっしゃっていたことを記憶していたのだが、ご相談にうかがったこの時の口調には驚くほどの力がこもっていて、とても冗談をおっしゃっているとは思えなかった。先生の熱いお言葉をうかがってとてもほっとした、というのが正直なところである。上智をご退官なさっても先生の探究心や好奇心はいささかも衰えることはないし、豊かで超域的なご考察をご教示いただくことは今後とも変わらずかなっていくであろうことは間違いない、と思えたひと時であった。この折のことをつれづれに思い返していて、ふと考えたことがある。宮本先生は実際の食生活に関してのみならず、ご研究やご執筆活動に対しても「肉食」でいらっしゃるのではないか、と。人間どうしの枠組みを超え、動植物や環境も含めた地球規模での真の共生への道を求めて貪欲にさまざまなアプローチを試みられるご研究姿勢、そのアグレッシブなお姿は、まさに「肉食」系である。気をもんであれこれ余計な口出しをしてきてしまったが、先生の、まるで年齢を感じさせない肉中心の食生活が、先生のご研究への旺盛なエネルギーの源であるのかもしれない。またしても私自身の考え（食生活）の枠組みの中に他者を無理やり詰め込もうとしていたことにはもはや平身低頭するよりほかない。先生のご研究とご執筆活動への変わらぬパワーに、こちらも変わらぬ尊敬を表明し続けるとともに、今後のますますのご活躍とご健康（そして引き続きのご指導）を心よりお祈りするばかりである。